

京都家庭集会祈祷会 聖書講筵

祈りの本質

――ルカ伝第18章1～8節――

1962年7月14日

小池辰雄

祈りは求めの心 常に祈るべきこと 全存在的にぶつかれ 対象化してつかむことのできないものをつかむ 祈らないではいられない 魂の呼吸 失われたる祈りの回復 義のための祈り 神中心か自己中心か 南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生する 私心なき祈りは必ず聴かれる 十字架と聖霊の祈り 聖霊のバプテスマ 完全性をもった三日月 聖霊の中にあつて祈る 十字架という道から中に入る キリストの信が来る キリストの本願 祈りの勝利

【ルカ18・1～8】

1 また彼らに落胆せずして常に祈るべきことを、譬^{たとえ}にて語り言い給う、
 2 『或^{ある}町に神を畏れず、人を顧みぬ裁判人あり。3 その町に寡婦^{やもめ}ありて、しばしばその許^{もと}にゆき「我がために仇^{あた}を審^{さば}きたまえ」と言う。4 かれ久しく聴き入れざりしが、其ののち心の中に言う「われ神を畏れず、人を顧みねど、
 5 此の寡婦^{やもめ}われを煩^{わづ}わせば、我かれが為に審^{さば}かん、然らずば絶えず来りて我を悩^{なや}さん」と』6 主いい給う『不義なる裁判人の言うことを聴け、7 まして神は夜昼よばわる選民のために、縦^{たと}い遅くとも遂に審^{さば}き給わざらんや。8 我なんじらに告^つぐ、速^{すみ}かに審^{さば}き給わん。然れど人の子の来るとき地上に信仰を見んや』

●祈りは求めの心

私は、こういう小さな集まりは好きです。明日は少し大きな集まりになりそうですが、集会は小さいほどよい。今日は「祈りの本質」なんていう少しいかめしい題を掲げましたが、何もそんな神学論をするのも何でもありません。祈りについて、しばらく皆さんと聖書を学びまして、それから祈ろうという、それだけの話です。

旧約聖書のなかに「詩篇」というのがあります。これは実は「詩篇」ではないので、「祈りの書」とヘブライ語では言われるところです。聖書の言は、神さまからの言と人間からの言葉で織り成されていますが、人間からの言葉は、これは本質的な意味において祈りである。私たちの発する言葉の中で一番深いものは、また一番本質的なものは、祈りなのです。ところが、この一番深くまた本来的な祈りという我々の言葉の本質から、だいたいこの文明人は、文化人は外れてしまっているという始末です。



小さい子供がお母さんにものを言ったり、あるいは泣いて求めたりする。あの姿、あの気合は祈りです。また、自然界においても、何か知らんけれども、詩篇19篇にあるように、

「³語らずいわずその声きこえざるに、⁴そのひびきは全地にあまねく、そのことばは地のはてにまでおよぶ」(詩篇19・3～4)

という中にも祈りというものが、沈黙の祈りというものが響いている。そのことに気がついて、その深い消息を言つたのは、パウロのロマ書の8章のところにあります。

「²²我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむ」(ロマ8・22)

「共に嘆き」というこの「嘆き」は、一番本質的な意味において祈りである。そして、その嘆きの一番深い嘆きをしたのは、同じくロマ書8章の26節に、

「²⁶斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは何かに祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成し給う」(ロマ8・26)

というのが、これもやはり祈りである。こうしてみると、祈りは求めの心であり、何か満たされざるものに対するところの求めの心であり、叫びであり、呻きである。そのことを、今日はルカ伝18章の1節から8節までの所を一つの題材として導かれないと思えます。

●常に祈るべきこと

「また彼らに落胆せずして常に祈るべきことを、譬にて語り言い給う、²『或町に神を畏れず、人を顧みぬ裁判人あり。³その町に寡婦ありて、しばしばその許にゆき「我がために仇を審きたまえ」と言う。⁴かれ久しく聴き入れざりしが、其ののち心の中に言う「われ神を畏れず、人を顧みねど、⁵此の寡婦われを煩わせば、我かれが為に審かん、然らずば絶えず来りて我を悩さん』⁶主いい給う『不義なる裁判人の言うことを聴け、⁷まして神は夜昼よばる選民のために、縦い遅くとも遂に審き給わざらんや。⁸我なんじらに告ぐ、速かに審き給わん。然れど人の子の来るとき地上に信仰を見んや』

ちよつとこの話を聞いていると、一体どこに祈りのことが書いてあるかと思われるわけです。ところが、ルカ伝の記者は、

「彼らに、落胆せずして常に祈るべきことを譬にて語り給う」

と、こう書いた。

「神さまは私たちの要求をご存知だから、そんなに繰り返して言わなくてもいいよ」

というようなことをイエスはある時、別なところで言われた。

「簡単に祈れ」

というわけです。マタイ伝6章6節のところに、



「⁶なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて、隠れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん。⁷また祈るとき、異邦人のごとく徒らに言を反復すな。彼らは言多きによりて聴かれんと思ふなり。⁸さらば彼らに倣うな、汝らの父は求めぬ前に、なんじらの必要なる物を知りたもう。⁹この故に汝らは斯く祈れ。「天にいます我らの父よ、願わくは、御名の崇められん事を。」云々」(マタイ6:6-9)

どうも、イエスという方は時々、矛盾したことを仰つたりなんかしているようだというわけです。

聖書の言はしばしば矛盾しているんです、おもてづらは。これを同じ平面で並べてみると、どうしてもつじつまが合わないわけです。ところが、聖書の現実是非常に多面的であり、多角的であり、また多次元的でありまして、言葉づらの矛盾なんていうことは一向差しつかえない。また、観念の上の矛盾も差しつかえない。それは、もつと大きな構造をもっている。もつと大きな有機体的な構造をもつた、渾然たる統一体的な、矛盾をそのまま大きな統一の中に持っているような、そういう現実ですから。どうか、皆さん、この聖書は決していわゆる論理で読んだらダメです。

ドイツ人というのは非常に論理的な国民ですから、ドイツ人の長所がまた短所でもある。ものを非常に論理的に考えるから、しばしば現実を見損なう。特に聖書なんていうのは、非常に矛盾といろんな誤謬があつて惨憺たる書です。その惨憺たる書を整えようと思つて、

「いや、ここところはキリストが言ったのであろう」

「いや、そうではなからう。後から筆を加えたらしい」

とか、それは学者の推論も当たっていることもあるでしょうけれども。そうすべてが論理的に決まりがつくものでもないし、かえつて論理的に決まりがついたと思うと、逆にまちがっているということがある。正直また、現実には矛盾も持っている。聖書の言は、

「その時に一体、キリストはどういう現実感をもつて言っておられるか」

と。キリストはその時その時の瞬間の現実に対してのつびきならない角度からものを言うてらつしやる。決して、なにか

「こういう場合にはこうなるが、ああいう場合にはああもなる。しかし、今の場合は、こうならばどうだ」

とか、そんな条件付きでものを仰らない。その時の現実にはピタッと水をわらずに、大胆に或る焦点に向かつて発するような言葉です。

譬話でもそうですよ。譬話にしても、その中心はどこにあるかということをしつかり直観しないと、譬話を枝葉に至るまで全部を整えようと思つたら、かえつて今度は中心がはずれてしまつて、全体がおかしなことになつてしまふ。



●全存在的にぶつかれ

そういつたものでありまして、

「たとえ譬にて語り言い給う」

という、この「パラボラー」⁵「譬話」も一体どこにその重点がかかっているかということ。

「父は知り給う。だから簡潔に祈れ」

ということも真理なんです。また、

「父は知り給うが、祈りはまた波状的に、この寡婦のように波状攻撃をなして祈れ」

と。また、別の譬でも、ルカ伝11章のところに、

「イエス或処あるところにて祈り居給いしが、その終りしとき、弟子の一人いう「主よ、ヨハネの其の弟子に教えし如く、祈ることを我らに教え給え」²イエス言い給う云々……」

⁵また言い給う『なんじらの中たれか友あらんに、夜半よなかにその許に往きて「友よ、我に三つのパンを貸せ。⁶わが友、旅より来りしに、之に供うべき物なし」と言う時、⁷かれ内より答えて「われを煩わすな、戸ははや閉じ、子らは我と共に臥所ふしどにあり、起ちて与え難し」という事ありとも、⁸われ汝らに告ぐ、友なるによりては起ちて与えねど、求もとめの切なるにより、起きて其の要する程のものを与えん。⁹われ汝らに告ぐ、求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出みいださん。門を叩け、さらば開かれん。」(ルカ11・1～9)

とある。この

「求めよ、尋ねよ、門を叩けよ」

は一回きりではない。

「何回でも叩け。何回でも尋ねよ。何度でも求めろ。与えられるまで求めろ。見いだすまで尋ねろ。開かれるまで叩け。途中でやめるな」

というわけです。

「手のノックくらいではダメだから体当たりしてノックせよ、ぶつ倒れてもいいからノックせよ」

というようなわけです。非常にその一面は激しい。なぜ、そういうものであるか。キリストは言われたでしょ。

「**なんじ心を尽し、精神を尽し、思いを尽して主なる汝の神を愛すべし**」(マタイ22・37)

と。イエスの要求される生活態度というものは全存在的です。決して、頭だけとか、口先だけとか、そんなものではない。

「全存在的にぶつかれ」



と。私たちの小さな経験でも、子供があまりせがむと、ちょうどこの裁判人みたいに、「ま、しようがない。仕方がないから、お小遣いをやっておこう」なんていうわけで、やることがあるわけですよ。イエスもここで、

「常に祈るべきことを譬^{たとえ}にて語り給う」と。絶えず波状攻撃しろと言う。

今の若い人の道の求め方を見ていると、だいいちキリスト教を求めて来る人が少ない。たまたま求めてきても、一、二、三回せいぜい五、六回で大体判断してしまつて、

「キリスト教とはこんなものか」というようなことで、何かでもって出て行って来なくなってしまう。

●対象化してつかむことのできないものをつかむ

求めの切なることは、皆さんもご存知のとおりと思いますが、あの達磨^{だるま}の所に求めて来た神光^{しんこう}という青年の求道の精神です。

教会では「求道者会」とかいうのがあるようで、私はそんなことはやってませんが、あいうのもやつてもいいと思いますけれどもね。

12月下旬のある夕方、青年が達磨のところを求めて来た。達磨は面壁^{めんへき}しているから、いつこうに振り向いてくれない。しかし、その青年は立ちすくんで動かない。やがて雪が降ってきて、青年は夜もすがら立ちすくんでいる。膝も雪に没しようという始末です。夜が白んできたので、さすがの達磨も、この青年の求道の切なる激しさに、一步も退かない求む方に動かされ、

「それでは、何だね?」

というようなわけで、しばらく問答したところが、

「いやいや、そんなことではまだダメだ」

と言って、また元へ戻って面壁をしている。そこで、神光は左の腕を切つて盆にのせて、「私は捨身で道を求めています!」

と。さすがに達磨もその捨身の態度に感心して、「それでは、私に今度は心を持って来てくれ」

と。さあ、心はどうやって持って来たらいいか。心なんていうものは見えない。心臓をくり抜くわけにいかない。心臓だつて心ではない。それで、神光は、

「心は得て得べからず。どうしても、心は得られませんが」と嘆いてそう言ったら、達磨は、

「いやそれで私はお前のために安心した。これからお前を私の弟子にしてやろう」

というわけで、これが第二祖になったという有名な話ですね。この「慧可断肘^{えかだんび}」の有名な雪舟^{せつしゅう}の絵を私も上野で見まして、その前でじつと立ちすくんで、雪舟の気迫に非常に感嘆



いたしました。

対象化して把む^{つか}ことのできないものをつかむというのは、これは信仰の世界です。その対象化して把む^{つか}ことのできない心を把む。キリストが、

「求めよ、尋ねよ、叩けよ」

という、その対象はやはり対象化して把む^{つか}ことのできない何ものかなのです。我々が祈り求めるいちばん奥の世界は、そういうものです。

「対象化して把む^{つか}ことのできないものをつかむ」とはどういうことか。それは、

「自分がつかまれる」

ということ事です。「つかまれる」という世界に入ることが、「対象化してつかむことのできないものをつかむ」という逆説になる。もし、「対象化してつかむことのできないものをつかまえた」としたらば、それは対象化しているわけです。

「対象化してつかむことのできないものをつかんだ」ということは、

「自分が本当にそのものによってつかまれてある」という体験に来ることなんです。これは本当の宗教の世界なんです。

それは、キリスト・イエスを見てごらん下さい。イエスという人は神と交わる。神のなかにイエスは取り入れられてしまった。神の中にイエスは取り入れられて、イエスというのはこの大きな円の中の内心円みたいなものです。だから、

「我と父とは一つなり」

と言う。一如であるという。けれども、この父の中にはつきりと子はいる。これ（大きな円）は父である。こういうようなのが、イエスが父をつかんだというつかみ方なんです。これは、本当は神さまにつかまれている。こちら側において、「お父さん」と言っているのではない。内側に入って、「お父さん」と言っているんだ、キリストというのは。父の懐にある。懐にあつて、「お父さん、つかまえた」なんて言ったつて――普通の世界なら、「お母さん」だけでもね、胎児です――このお父さんの中に入ってしまっている。

「我を見し者は父を見しなり」（ヨハネ14・9）

と言えたのは、これなんです。これはやはり、実は今日の本質の問題に来る。

● 祈らないではいられない

「彼らに落胆^{さくちん}せずして常に祈るべきことを、譬^{たとえ}にて語り言い給う」

という、このルカ伝18章1節がきわめて大事なんです。「落胆せずして常に祈るべき」のこの「べき」という字は「デイ」というギリシア語でありまして――口語訳聖書にもやはり「べきこと」と書いてあるが――もし、聖書のここを訳すなら、私はそう訳さない。



「彼らに気落ちせずして常に祈らないではいられないことを」

と訳したい。「べき」というと、日本語としては命令になつてしまつて、ドイツ語でいう「ゾッレン」(sollen)みたいな気持です。ドイツ語でいう「ゾッレン」ではなくて、これは「ミユッセン」なんです。「ミュッセン」(müssen) というのは、「ねばならない」という意味もあるが、「ざるを得ない」という意味もある。

「祈らないではいられないようになることを」

と訳したい。「ねばならない」「べき」という世界には、外側から強いて「何々させられる」「どうしてもそうしなければならぬ」という、外から人を強いるのと、もう一つは内側から強いられて、内側からやむにやまれずしてするのがある。これが英語の「ノー・アザー・キャン・アイ・ドゥー」(no other can I do) 「私はかくせざるを得ない」という、

「何々せざるを得ない。やむにやまれずして、こうせざるを得ない」

ということです。まだ、「祈りなさいよ」なんて言っているうちはダメです。そういうのは、言う人もダメだし、聞く方もダメです。では、私はあなた方に何と言うかというのと、

「祈らないではいられませんね。そうでしょ」

と言います。祈らないでもよい人は信仰の世界に來なくていい。祈らないではいられない人だけがこの信仰の世界に來るわけです。始めはなかなかそういう境地には來ません。また、人間は死に至るまで常にそういう境地とはいいませんよ。私だつて、躓いたり、転んだり、すべったりでダメです。けれども、祈らないではいられないという境地がだんだん身についてきたら、これは本ものの世界に入る。

●魂の呼吸

私は結論を簡単に言えば、

「祈りの本質とは何かというと、祈らないではいられないということだ」

と言う。皆さん、呼吸の本質は何ですか。呼吸しないではいられないことだ。あなた方は息をしないで生きてられますか。眠つていて知らない時も、息をしている。

そして、心臓は——いくらスイスの時計がよくたつて、それは止まる。けれども——我々の心臓の時計は、「ドキン、ドキン」というこの時計は、我々が地上の生涯を終るまでは止まらない。心臓は打たないではいられない。なんとすれば、それは生命であるからです。生命は活ける時計をもっている。活きた時計を。キリストは「活きた水」なんて仰つた。

「汝らの腹から活きた水が流れてるぞ」

と。活きた時計を、皆さんは持つている。一番素晴らしい時計を皆さんは持つている。これは世界中のどんな素晴らしい時計だつて、この心臓という時計にはかなわない。そういう生きた鼓動です。心臓の鼓動というのは、なぜ、そうかというのと、正に生きた生命であるからである。



我々の魂の生命は何であるか。我々の魂の生命は肺が呼吸するように魂が呼吸する。魂の呼吸は何か。それは祈りである。魂が祈りの呼吸をしていない魂は、生きていない。

だから、祈りは、もしカント流に言えば、これは「先験的せんげん」なものです。祈りというものは経験以前のものです。祈りの本質は「アプリアリ」、先験的である。我々は人間である限り、みな祈りを持っている。だから、人間は本質的に宗教人です。

「私は唯物論者で、神さまなんか信じない」

なんて、どんなに言ったって、その人は魂がある限り、本来、宗教人である。本来、神さまの子です。仏教的に言えば「本来、仏性ぶつしょうあり」です。

「山川草木 悉く仏性あり」
ことごとくぶつしょう

という。山川草木どころではない。万象は、まして人間は、仏教的に言うならば、仏の性をもっている。

我々は本来、神の子です。どんな罪悪人や極悪人であろうと、みな本来、神の子である。パウロが、

「義人なし、一人だになし」(ロマ3・9)

と、すべての者は罪びとだと言ったでしょ。これも真理です。

「万人は罪びとである。義人がいない」

ということと、

「我々は本来、神の子である」

ということとは決して矛盾しない。こっちの方を、ヘタすると、みんな忘れていて。あまり、プロテスタント神学が「罪、罪、罪」と言って、罪のことを言うために。そして、

「わがうちに善なるものなし」

というようなことと――私もそれはもちろん真理だと思いますよ、私もある時はそれを言います――けれども、そのことと、

「私たちは本来神の子である」

ということとは決して矛盾しない。この面を忘れてはいかん。

●失われたる祈りの回復

我々は、

「失われたる神の子」

なんです。失われたる、喪失したところの、やはり神の子なんです。どんなに、ユリの花が枯れても、これはユリの花です。造ったユリではない。これは本もののユリです。私たちも、造った人形ではない。皆さんは人形ではない。皆さんは、どのような人もみんな生きた人間である限り、人形でなくて人間であるかぎり、それは神の子だ。

この「失われたる」を回復する。



「そんなことがあるか。そんな『失われたる』なんていうものはユダヤの神話だ。楽園喪失なんていうのは神話だ」

と。そうでしょう、あれは神話です。

「蛇にだまかされてどうのこうの」

と、それは神話ですよ。そんなことは、近代人なら、私だってそれは文字通り、額面通りには信じませんよ。

けれども、創世記のあの記事において、我々の現実というものは、ああいう神話的表現をもつて最もよく表現されるところの事態である。それは、昔といえども今日といえども変りがない事態です。それをあのように表現して何が悪いか。あのように表現されたところにまた聖書の歴史的な啓示の段階がある。啓示の段階の中に本質がちゃんと含まれているというわけです。

私たちは「失われたる子」であるが、本来、私たちは祈りをもっている。祈りも失われているんです。この失われたる祈りを我々はどうして回復するか。そこに問題がまたあるわけです。本来、私たちは祈りの人なんだが、

「それではそれでよろしい。おしまい」

というわけにはいかない。本来、祈りの人なんだが、祈りをもっているんだが、実はその祈りが失われている。失われてないような顔して、よく、葉書や手紙に、信仰のない方——私もかつてそうですね——

「ご回復をお祈りします」

なんて書く。何も祈りやしない。そんな空念仏のようなことを書く。しかし、私はこの頃、葉書にとにかく一言、

「お祈りします」

と書くときには必ずその時に瞑目して祈ります。偽りとなつてはいかんから。

失われたる祈りを回復することが、これがやはり私たちの側からの大事な救への事態でもあるわけです。それで、キリストは、

「祈らないではいられないようになれ」

ということを論しておられるわけです。

●義のための祈り

この寡婦は裁判官に何とかして仇を——自分は不当なことを受けているが——これを正しく審いてくれとしつこく訴える。キリストの譬話はおもしろいですね。そうすると、この裁判人は、

「我は神を畏れず人を顧みねど、けれども、これはうるさいから」

と。よほど、傲慢な裁判人です。要するにこの寡婦の訴えの、求めの、祈りの切なることは、



相手がそんなダメな、聞いてくれないようなやつでも、そんなやつをも動かすような祈りで——キリストがそこへもつてきた裁判人の悪さかげんは神を畏れず、人を人とも思わない傍若無神、傍若無人というやつ——そういうやつをも動かすような祈りだということですよ。

「まして、神さまはこんな裁判人とは違うよ」
と。こういうわけでしょう。そこに、この譬えの素晴らしきがあるわけです。

神さまはこの切なる祈りを聴かれる。この寡婦は何を一体祈っているかということ、事態が正しきに変えられんがために——自分の幸福とか何とかいう御利益を祈っているのではない——正しかるべきことを、不当なることが正しくなるように、義のために祈っているわけだ。義のために祈っているこの祈りは、なるほど、その事柄は自分に関することだから人間的な感情の中にはいろんな要素もあるでしょうけれども、とにかく、内容は義のために祈っている。

この譬話には、そんなに詳しいことは書いてありませんけれども、私たちは祈るときに、初めは何でもいいですよ。とにかく正直に、自分がこうして頂きたいという——学生だったらば、

「入学試験に及第したい」

とか、若い女の人だったら

「結婚したい」

とか、あるいは、病気の方だったら

「病気が治りたい」

とか——いろいろ率直な要求がある。キリストは決して禁欲主義ではない。それぞれ、要求がある。その要求を率直に持つていっていい。

●神中心か自己中心か

パウロはロマ書で「霊肉の対立」ということを言っているが、それはいわゆる精神的と肉欲的というような対立ではない。「霊肉の対立」は、我々全人が、我々の全ての要求、能力、すべてのものが霊であるか、我々の全ての要求が肉であるか、のどっちかなんだ。どんなに崇高なようにみえても、それが自己中心であったら、それは「肉」という。どんなにつまらないようなことであっても、神中心であったならば、それは「霊」という。この「霊・肉」というのは、我々の精神と肉体の関係ではない。福音的な対立です。我々の救いは霊肉渾然というが——魂と肉体との渾然たる「全人」の救いなんだが——この全人が霊的であるか、全人が肉的存在であるかという、こういう対立ですから。

我々の祈りが、どんなにその内容がよさそうにみえても、自己中心である限り、その祈りは肉的存在な祈り、地的な祈りであって、これはダメですよ。ところが、その祈りが、たと



え肉体の病の癒しであろうと、試験に及第することであっても、それが自己中心でなくて、自分が本当に神の器として自覚されて、神のご用に立つ御意を体現しようという角度から、「どうか、この病気をいやしてください」

という角度の、そういう心根で祈っている祈りは霊的な祈りである。

我々はもちろん割り切った人間ではない。人間というものはいろんな要素を持っています。始めはそういったような霊と肉と混雑したようなものであるでしょう。現実はそのうちで自分の祈りが霊の方に切り変えられていくわけだ。始めは素朴に祈っていた祈りがいよいよ高次になっていく。祈りというものは、そういった私の肉体的な自己を脱していくにつれて、祈りそのものに力がはいつてくる。

肉体としての我々が呼吸せざるを得ないように、霊人としての、霊なる人としての、「第二のアダム」としての我々は、今度はその意味において霊の呼吸をせざるを得ない。神の呼吸、神的な呼吸をせざるを得ない。祈らざるを得ないような祈りになってくるわけです。では、そのようなことはいかにして可能であるか、という問題が残るわけです。

●南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生する

それを申し上げる前に、法然聖人のことをちよつと引き合いに出してみましよう。法然の「一枚起請文」というのを皆さんはご存じと思います。法然の晩年に、法然の教えをいろいろあつちこつちに解釈してどうのこうのと言って問題が起きてきた。それで、法然に、

「法然の教を簡単にまとめてもらいたい。そうすれば後で間違いが起きないから」

というようなわけで、お願いしたらしい。そうしたら、法然がちよつと一枚にごく簡単に書いてくれた。

「……観念の念にも非ず。又字文をして念の心を悟りて申す念仏にもあらず。ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑なく往生するぞと思いとりて、申外には別のしさい候はず。……口一かつに念仏すべし。」

と。この

「南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞ」

という法然の気合はキリストが、

「祈りたることは直ちに聴かれたりとせよ」

と言われているのと相照応するような心根です。

「真に汝らに告ぐ、もし汝ら信仰ありて疑わずば……、此の山に『移りて海

に入れ』と言うとも亦成るべし。かつ祈りの時向にても信じて求めば、こと

ごとく得べし」(マタイ21・21～22)

とある。ずいぶんキリストの言葉は危ないですよ。



「祈りの時何にても信じて求めば、ことごとく得べし」

「何でもいいから、それは御利益でも何でもいいから、信じて求めれば、ことごとく得べし」

と。イエスは条件なしにものを仰る。それが躓きになりますけれども。もちろん、それで躓いてはいけないわけです。キリストが

「何でもいいぞ」

と仰るときには、そんな例外的なことを考えていらつしやるわけではない。もう100%に、本当に切に自分が捨身で求めるときは――何と言いますかね、いわゆる御利益ごりやく的な角度から言っておられるわけなので――

「盲人は見、跛者は歩み、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦よみがえらせ

られ、貧しき者は福音を聴かせらる。おおよそ我に躓かぬ者は幸福さいわいなり」(マ

タイ11・5～6)

と。それは、みんな自分の切なる願いを求めたら、キリストは片っぱしから聴かれたでしょ。そういうようなわけで、「何でもいいから」と仰ったわけです。ただし、

「おおよそ我に躓かぬ者は幸福なり」

とある。願いはきかれるんです。聴かれるけれども、聴かれたこととただ嬉しいと言っていたらば、それは御利益になるので、それは我キリストに躓いてしまふ。願いが聴かれたことをもって一体どうするかというと、その願いが聴かれたことによつて、その願いを聴いたところの主体であるところの神さまをあがめることです。

もうひとつ言いますと、ルカ伝17章17節の癩病人の譬話がそれです。10人の癩病人が癒された。その後、そのうちの9人は放つたらかしで、ただ一人がイエスのもとに帰つて来て、栄光を主たる神に帰した。イエスの前に平伏して感謝して、神さまに帰った。

「他には帰つてくる者はいないのか」

と言つてキリストが嘆かれたということがあつたでしょ。あのように、聴かれたことをもつてただ満足して、

「めでたし、めでたし」

と言っているのは、神さまを忘れている者です。それでまた困ると、また神さまに行く。そんなのは信仰じゃない。いよいよ神に仕えて、栄光を神に帰して、神に仕える実存に入ることが、それが本当に「我に躓かない者」です。ところが、大方の大衆はキリストにたくさん恵みを与えられたけれども、これはみんな躓いてしまったから、本当の信仰に入つたのは何人いるか知れないくらいに少ないわけです。弟子たちですらも、本当の意味ではキリストに躓いてしまった。そこに、どうしても十字架が来なければならなかった意味があるんです。



●私心なき祈りは必ず聴かれる

今、私が「祈りの本質」と申しまして、皆さんと学びたいのは、

「祈りがたとえ聴かれなくても、あるいは聴かれても、祈りの内容が聴かれようが聴かれなかるうが、祈らないではいられないというのが祈りだ」

ということですよ。祈らないではいられない祈りにおいて、神さまと交わっているということが、本当の救いだということですよ。

「祈りは、私心なきところの祈りは、即ち神の御旨みむねにかなうところの祈りは必ず聴かれる」

と、キリストは言われました。聴かれています。

ですけども、我々の現実には罪びとの現実であり、罪の世の現実であるから、その現実の事態はしばしば矛盾の相をもっている。これは神の新天新地が来るまでは仕方がない。それがたとえ聴かれたからと言って、それが直ちに完成された「神の国」ではありません。完成された神の国というものは、キリストのもたらす最後のところですよ。今は、

「神の国は汝らの中に在るなり」(ルカ17・21)

というのは、この罪の世の中に切りこんで来るところの、神の国の出店みたいなものだ。神の国の核が、中核がやって来た。けれども、「神の国」そのものではない。

そんな、分析したことはキリストは言わないですよ、

「神の国は汝らの中にあり」

と言ったって。けれども、闇の世の中に、闇の中に光が来ている。灯火が来て、今に全部、この闇が征服される。まだ闇の部分もたくさんあるけれども、とにかく、光が点々点々と来た。夜、空から飛行機で下を見ると、きれいですよね。あのようにクリスチャンの一人びとりが灯火の如くに闇の中にあるわけだ。闇の部分もまだたくさんある。けれども、

「神の国は汝らの中にある」

というのが、終末的現実としての、我々の今の現実ですよ。

祈りの本質はどうかというと、祈らないではいられないというのが本当の祈りであって、それが聴かれようが、聴かれまいが、その現象面をもちや超越している。現象面は乗り越えている。その現象面はなぜ乗り越えられるかというと、

「どうでもよく」

と言って乗り越えているのではない。必ず本質的には聴かれています。我々の判断には、神さまの世界は分かりますよ。本質的には聴かれていますという意味において、私たちの祈りは、

「祈らないではいられない」

という面と、

「必ず聴かれています」



ということがぴたつと一つになっていく深い現実です。これが本当の祈りの世界である。そうすれば、この祈りはいつも常に力を得る。

私たちが祈って平安と力と歓喜が来なければ、その祈りは本当の祈りではない。これははっきり言えます。その内的な平安と内的な歓喜と内的な力というものは必ず来る。そういう祈りに対して非常に欠けているというのが、今のキリスト教界の無力の原因である。

●十字架と聖霊の祈り

では、どうしてそういう祈りができないかというと、どうしてもそれは聖霊の問題になってくる。これは歴史的にもはっきりしている。その聖霊の問題は、どうしてペンテコステが来たかというところ、キリストの十字架を通してです。

「わが受くべきバプテスマあり」

と言われた、このキリストが十字架にかかって、そういう祈りの場の土台をこの十字架が築いてくださった。キリストが復活してから四十日間、それからまた十日間——特に終りの十日間はみんな集まって祈りを共にしていた——五十日目にペンテコステとなった。十字架の約束の霊、聖霊が臨んだ。なぜ、聖霊が臨み得たか。隠れたるこの十字架という大きな土台があったからです。

私たちが祈らないではいられないその魂の呼吸は、その土台は十字架によっている。十字架によって自己から贖われた、私心なきところの世界を自由という。私ごころのあるところには本当の自由はない。御利益の世界には自由はない。宗教の世界は現象的には、御利益であっても、私心があっても、一生懸命で祈りこめば、それはある時は現象は起きますよ。けれども、それは聖霊の世界ではない。それは他の宗教的な現象にすぎない。宗教であっても、キリストの福音ではない。どこまでも十字架のないところには、キリストの福音ということは絶対にありえない。

あの素晴らしいイエスが地上に居て、さあ皆が救われたかと思うと、一人も救われやしない。イエスにどんなにあんしゅ按手されようが、どんなにその時にいわゆる霊的能力が来ようが、彼らは救われやしない。それはどうしても十字架を通らなければ救われやしない。キリストはそれがよく分かっている。イエス自身はそのことをよく知っておられた。どうしても、キリストが十字架にかからざるをえなかったのは、そういう神さまの贖罪の愛です。失われたる神の子を輩出せんとする、神・キリストの本願があったからです。祈りの心が失われていたその祈りの心を回復する土台であった。そして、この土台が築かれた現実において彼らが祈っていたから、聖霊が来た。そして、いよいよ十字架の意味がはっきりしてきた——意味ではない——それは深く自分に受けとられてきた。祈りそのものの本質は、

「祈らざるを得ない」

ということですが、その祈りの本質の「祈らざるを得ない」ということは何によって来る



かというところ、どうしてもここに来なければならぬ。十字架と聖霊の祈りというものが我々の中に入ってきて、祈りの霊が入ってきた。聖霊は祈りの霊ですから。祈りの霊が入ってきてから今度は祈らないではいられない。聖霊は祈りの霊ですから。私自身の小さな経験でも、そのことははつきりと申し上げます。その祈りの霊が入って来たら、祈ることが楽になるし、力が入ってくるし、全体の生活に何だか知らんけれども、力が入って来るわけです。肉体は疲れましたも、魂は祈りの世界でまた回復する。すると、全存在にまた力が入って来る。

ヨーロッパに行つてくると、みんなだいたい疲れるとみえる。私だつて、それは肉体的には多少疲れたかもしれませんが。けれども、帰ってきた翌日からもう学校へ行っているものね。〔註：1961年5月から1年間、西ドイツのハンブルク大学で日本学の客員教授として赴任した〕

「まあ、一週間や十日は休みなさいよ。疲れているでしょうから」

とみんな言ってくれる。私は別にそんな休みたくもない。

「いや、そんなことを言つても、今に疲れが出てくるよ」

なんて言つても、とうとう夏休みまで疲れが出てこなかったものだから、

「負けたね、小池さんには」

なんて、そんなことを言つて笑っているやつがいました。まあ、それは私は大したことはないですけども。

●聖霊のバプテスマ

とにかく、私たちはそういった力の秘訣をこの祈りの世界からいただく。それは何かというと、御霊が私たちの中に祈りの力となつていてるわけです。キリストが、

「密室で祈れ」(マタイ6・5)

ということを言われた。電車の中でも目をつぶっていればもう密室です。外がいくらやかましくたつて、密室の世界に入れる。どこでも祈れるですよ。祈る時には、キリストが言われたように、簡潔で結構です。そのかわり、ひとつのことを祈つても、決して、それがいい加減な祈りをしてはいかん。いい加減な祈りをいくら繰り返したつて、百万遍祈つても、それはダメだ。それよりか、本当に全存在を傾けた祈りを簡潔に祈ることです。

「天にまします我らの父よ」

と、もうそれだけで祈ります。

「御国を来たらせ給え」

と、それだけで祈ります。私たちはそんな「主の祈り」を繰り返してはしません。そんなことをすると、かえって新鮮味がなくなってしまうから。祈りの中にそういう文句が入ってくるだけの話です。私はヨーロッパで教会に通つていましたけれども、あの「主の祈り」



をドイツ語でしょっちゅうやっているんだ。牧師さんが、
「もういい加減、小池さんも主の祈りを覚えただろう」と言うので、

「私はしません。私はいわゆる主の祈りはしないけれども、私の祈りの中にそれが自然に入ってくるだけの話です」

と言ってやった。正直、向こうへ行きますと、学者もいますし、牧師さんもなかなか立派です。いいお話もなさいます。決してそれは悪くはない。結構なことですよ。けれども、私は精神的にひとつも打たれなかった。それはなぜかと言うと、こんな小さな存在だけれど私の中には辛子種からしたねひとつぶの御霊が来ているからです。

「ああ、私はヨーロッパに来たけれども、マルチン・ルターさんの国へ来たけれども、

ルターさんの国の信仰は今がダメだ」

と思った。大体もう形式です。習慣と伝統と形式。それは悪くはないです。ある意味においてそれはしみているから、なかなか結構な面もあります。けれども、信仰そのものは、

「この国〔西ドイツ〕の信仰はどうだ？」

と聴かれたから、私は

「大体、信仰は眠っています」

と言った。そしたら、私は有名になつてしまった。私が「眠っている」と言ったと。それは、お話を申しあげまして、向こうの方は、私みたいな型破りなのがいるから、むしろ喜ぶ。その牧師さんは正直な方で、

「どうして、あなたのようなそういう境地になれるか。私もなりたいたいものだ」

というようになことを言っていました。私はある時とうとう、「聖霊のバプテスマ」という短文を向こうの教会の新聞に書きました。

「バプテスマは、洗礼はなさいます。結構です。けれども、それなら本当に霊のバ

プテスマを、御霊のバプテスマをしていただきたいものだ」

と。ところが、残念ながら、この十字架が――どこの教会にも立派な十字架が飾ってあるけれども――胸の中に本当に十字架が立っていないわけだよ。

●完全性をもった三日月

本当に胸の中に十字架が立って、

「我れキリストと偕ともに十字架につけられたり。もう私は生きていません」

と、パウロと共に叫べるんです。あいかわらず、古い私は生きてますよ。ダメですよ、小池なんてのは。だけれども、

「このダメな私の中にダメでないものがあります」

ということが言えるんです、私は。皆さんもそれが言えるわけです。



古い私は、いつまでたつても、よくなりはしません。死に至るまで私は三日月にすぎない。満月になんかなれやしない。せいぜい三日月くらいだ。三日になればまだいくらいなもの。一日か二日も知れない。けれども、これはともかく太陽の光をうけている。そして、必ずこれが満月になることは確信がある。どんなに暗い所が大きくても、私は欠けたるガレキの如き存在でも、その中にこれが来ている。これが必ず今に満ちて満月になる。

「汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ」(マタイ5・48)

という。私は、あの言葉はありがたい。不可能ですよ。あのものすごい不可能な言葉が「ありがたい」とはどういうことか。

「汝ら、父の全きが如く、必ず全くなる。私(キリスト)が既にみ霊となつてお前の中に入っているではないか」

と。そういうわけです。それは即ち、三日月といえども、完全性をもつた三日月である。完全性がある。皆さん、信仰の世界に、この完全性という、救いの全さというその質をもたなかったら、つまらないですよ。いつまでたつても、百年たつたつて、二百年たつたつてしようがないですよ、これは。この質が、完全の質が来たら、もはや、

「朝あしたにこの完全な質を受ければ、夕ゆうべに死すとも可なり」と、孔子とともに言えるんです。なんとなれば、死んでも死なないからであると。

なぜ、今のプロテスタントの信仰が――私は「カトリックはいい」とは言わないけれども、カトリックは知りませんが――プロテスタントの信仰がなぜ観念化したか。「信仰、信仰」と言う。明日は「信仰とは何ぞや」なんていう話もしますけれども。「信仰」が私にされた信仰だから、しようがない。どうしても、御霊の、使徒たちのこの御霊の信仰でなければダメです。これは、どんなにダメでも、一つですよ。

「現実に私は一つになりきった」

なんて、絶対に言いません。決して、なりきれないんだから。なりきれないけれども、「一つの世界に入っている。キリストにとり入れられている。キリストは谷底へまでも下りて、失われたる迷える小羊を探しだして来て、肩にかついで谷底から上がって来るキリストでしようが。私たちはそのようにして、

「祈りでなければ、私はいられません。そうでないものは、私ではありません」

という恩寵の世界にいる。祈りは既に恩寵です。祈らせられるということは、そういつた恵みの中に入っている。キリストの祈りが来て、聖霊の祈りが来て、祈りを助ける。祈らしめる。祈れない時は、「私は祈れません」と言つて祈りなさい。

「神さま、私は祈れません。けれども、あなたは私を救ってくださいましたから私は大丈夫です」

と。祈りは、「何々してください」ではダメですよ、そこに「です」という、既に勝利の断定が来ないと。始めはそれでいいですけども。だけれど、詩篇を見てごらんください。始



めは非常に嘆いたり苦しんだりしているけれども、終わりの方に来ると感謝と讚美にかわっている詩篇が多い。詩篇102篇だつてそうだ。始めはもの凄く惨憺さんたんたるものですがけれども、終わりに行って、すっかり感謝と讚美になっている。決して、私たちはとり澄ますことも何もいらん。あるがままに祈ればいい。

●聖霊の中にあつて祈る

法然も完全に仏の世界に入っているから、

「往生することを思いとりて申すほかに別の子細はない」という。

「南無阿弥陀仏」

ということとはもはや、自分の中で言っている仏の声みたいなのです。仏の声で祈っているんだ。我々は聖霊で祈ってしまったているわけです。

法然なんていうひとはもうそういう境地に入っているからね。ある夜更けに、法然が声高に念仏しているので、性信坊しょうしんが老体を痛ましく思い、何か御用でもあるかと思つて、そうつと――祈つているとは、念仏だとは、思わなかつた――遣戸やりどを開いてみると、法然の体から灼々として光輝が発していた。坐っている畳二丈一杯にその光が射していたという。仏の光が法然の回りに射していた。まあ、そういうような坊さんですよ。まだまだ、法然という人はいろいろな逸話のある方ですが。

私は昔の、法然にしろ、親鸞にしろ、道元、白隠、日蓮、榮西、源信とか、ああいうご連中を少しかじりまして、本当に頭が下がるですよ。とにかく、パウロとかヨハネ、ペテロというようなご連中がキリストの御霊の世界に入っているのと同次元的な世界に、この仏の世界で彼らは入っていた。私たちも、もし本当に聖書の世界と同質的なキリスト者となりたければ、いや実に本当に本来、神さまが人間らしい人間として喜び給うような人間になりたければ、肺が呼吸しないではいられないように、我々の魂が呼吸をしないではいられないところの、祈りのひとであることです。

それは簡単にも祈れば、夜もすがら徹しても祈れる。自由自在です。大声にも祈れば沈黙して小声にも祈れる。沈黙でもいい。祈りにそんな形式はありはしない。長くも短くもいい。ただし、それはすべて本ものでなくてはいかん。すべて偽りではいかん。ただ大声を出すことがよいのでもなければ、ただ短いことがよいのでもなければ、また、繰り返して長いことがよいのでもない。そういったことには躓かない弾力性をもたなくてはいかん。

法然聖人は一向念仏ということをし、

「只ただ一かうに念仏すべし」

と言つた。我々はただ一向に祈る。



「祈りが聴かれるか、聴かれないか」

ということがよく問題になります。祈りは、根源的に主に即するとき、必ず聴かれています。これはヨハネ伝15章7節に、

「汝等もし我に居り、我が言汝等に居らば、何にても望のぞみに隋したがいて求めよ、さ

らば成らん」(ヨハネ15・7)

とある。「居る」という、中に入っている。

「我に居り、我汝等の中に居る」

という。「の中に」居る。内心円です。我々はキリストの内心円とならなければダメです。内側で祈る。外側から祈っているのではない。内側に入って、懐ふところの中に入って祈るということは、言うまでもなく、聖霊にあつて祈るということです。中に居て祈っているんですから、もはや自己からはずれている。ですから、その祈りは必ず、何にても成るんです。

●十字架という道から中に入る

さつき、マタイ伝かどこかで読んだ、

「何でも祈れ。必ず成る」

というのもそれと同じことだ。大事なことは、「に居る」ということです。「メネイン」という字です。「の中に」入っている。「中に入る」ということは、もう繰り返すまでもなく、御霊によらなければ、この中に入れない。聖霊でなければ、中に入れない。

「聖霊」は何か難しいことかといえ、ちつとも難しくはない。十字架がちゃんとこの中に入る道を開いている。ここにちゃんと十字架が道を開いている。この十字架という道から中に入れる。十字架という道から必ず入れる。誰でも入れる。十字架を通れば必ずその中に入れる。これがもう秘訣です。であるから、

「何でも求めよ。さらば、成る」

という。「成る」というのは、

「お前の願いが成る。それは同時に私の意こころが成る」

ということ。そうでしょ。私たちの願いと神さまの意とが――神さまの御意はプラス。我々の自分の願いは、自己に執する願いはマイナスだけれども――私たちが本当に願うというの、御意が成るといふのは、聖霊においては自分というものが消されているから、中に入ってしまったって、全体がプラスになつてしまふわけだ。それで、必ず成る。根源現実においては成っている。それが本当にその時、現実に聴かれれば、その聴かれたことをもちろん感謝していい。けれども、感謝するのは、どこまでも神の中に入って、いよいよ御意を現せんがための感謝である。たとえ、現象的に成らなくても、やはり同じく感謝する。どちらも感謝です。どちらも御名みなを讃えるだけの話です。必ずそれは、現象的に成らなくても、根源的には成っているんだから。



へたすれば、私たちは御意みこころと思つて、御意でないことを祈っているかも知れませんよ。だから、いつも碎けてなくてはいかん。

「私は御意を祈っています」

なんて、大それたことではいかん。いつも碎けの心です。御意だか何かは分かん。けれども、碎けの魂で祈っているところには、自分が分からなくても、

「お前が分からなくても、私は私の意こころをやつていくよ」

という。そうなら安心ではないですか。何とも説明のつかない境地です。平伏した無私の心が即ち碎けの心です。ですから、率直にぶつかつてくださいよ、自分のお願いしたいことを。何も遠慮はいらんですから。お願いしたいことをぶつけて、自分をそこに任せきつてしまつて、自分というものがはずれていくような祈りになつていけばいい。そうすれば、必ずそれがもはや、いわゆる聴かれようが聴かれまいが、必ず根源的な意味において聴かれているという確信でもつて進んでいきますから。

●キリストの信が来る

福音書においてキリストがいろいろな病を癒された。福音書に出てくるのは病の癒しが非常に多い。それで、へたすると躓きになりますけれども。今の私たちの普通の生活のいろんな現実において、それがどこまでも「主のもの」として自覚されなければ、祈りに本当の力は来ない。本当の平安と本当の福音的な歓喜は来ない。もし、それから外れて喜んだり、いわゆる感謝して、十字架がどこか抜けていたら、それは新興宗教になつてしまう。

「キリスト教、キリスト教」

なんて言つてたつて、知らない間に新興宗教になつてしまう。十字架のないところに福音はないですから。どうか、皆さん、群れは小さくても質的には、百万人といえども負けないクリスチャン一人びとりであつてください。

「そんなものに私はなれません」

と、絶対そんなことを言つてはいかん。なぜ、なれないか。必ずなれますよ。それは、御霊が来るところには絶対に、

「全世界といえども、我れ往かん」

という——この聖霊はそれ以下のものではないですよ——み霊というこのキリストの霊は、「全世界といえども」という驚くべき、私たち小さなものをそうやって動かす原始力だから。この原始力はどんな素晴らしい力を内包しているかわからん。神さまは、全託する者には無限にその人を使おうとしていらつしやる。全託しなければだめです、分裂してたら。私たちはしかし、なかなか全託ができないけれども。

「全託ができません」

なんていう心配はいらんですよ。申し上げているとおり、どんなにそれが分裂して混雑し



ていようが、全託的なものがここにあるんですから。いつもそこに焦点をおき、そこに平安と歓喜と勝利とをもつて進んでください。そういう迫力がなぜ出て来ないかというところ——絶対にはこれはみ霊の世界です——み霊でないところには、それだけの確信は出て来ないんです。どこかに、「自分の信仰」なんてやっていているうちは。

「自分の信仰は大丈夫かな、まだ薄いかな」
なんて、薄いも厚いもありはしない。自分の信仰なんかには絶する。申し上げているとおり、絶信の信です。自分の信仰なんかには絶するところにキリストの信が来るんです。

●キリストの本願

皆さん、一人、二人、三人と、本当に悩んでいる人、苦しんでいる人、求めている人を救ってやってください。この道に入れることです。

「私は今年一年かかって一人のひとを本当に救ってやろう」
と、その人のために祈ってやりなさい。また日曜に——何もわざわざ強引に引つ張って来ることはありませんけれども——その人が来ないではいられないようなことになってくるんです。何も会員を増やさんがために、私はそんなケチなことを言っているのではない。本当に一人の人をも失わずらんがためにと、

「ただ一人の亡ぶるをも望み給わず」(ペテロ後3・9)
とペテロ書にも書いてある通り、神さまは深い忍耐をもって待っている。我々が地上に置かれてる限り、一人でも二人でも、もはや不転の救の世界に入れてやりたいという悲願が起きてくるんです、この御霊が来れば。この悲願が起きてくる。それは祈りではないですか。祈りとは即ち、

「たとえキリストに棄てられても、このはらからのためには」
というのがパウロの祈りではないですか。

「もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから詛のろわれてキリストに棄てらるるも亦またねがう所なり」(ロマ9・3)

これは聖霊の祈りです。パウロの祈りと言ったって、パウロの中で聖霊が祈っている。「祈らないではいられない」

ということとは結局、自己に執しているのではない。自己に執している限り、そんな心は出てこない。キリストのこの恵みがたまらないから、祈らないではいられない。人を救にもたらさないではいられない。キリストの本願、み霊の本願というものは、私たちを救わないではいられない。私たちが眠っていても、なお目覚めて祈っているのがみ霊である。だから、私たちがこのみ霊の祈りの火を点ぜられたら、その祈りの火が私たちの中で燃えているから、他の人のために祈らないではいられないということです。たとえ地上でその祈りが現実には聴かれなくみえても、どっこい、聴かれます。その人が地上を去ってから、



驚くべく聴かれるということがいくらでもある。私の兄貴は聖書の扉に書いてくれた。

「この福音の世界に迎えられる者がわが家族わが親戚に我一人ならぬを祈りて」

と書いてある。私は彼が死んでから、この文句を聖書の中に発見した。ああそんなにしてくれていたかと。彼が死んでから私の兄貴の祈りは私に火が点じた。そんなもんですよ。

●祈りの勝利

けれども、人生は悠久なるものです。地上でたとえ聴かれなくみえても、それが本当の「喜劇」「コメディア」です。これが本当のダンテの言うところの「コメディア」です。悲劇ではない。我々は地上でどんなに悲劇のようにみえても、それが大喜曲に、大歓喜の調べに変わる。それが福音である。

祈りは常に本質的に勝利です。人生を勝利させるものは祈りである。一切の力の源泉は祈りである。聖霊の祈りである。こんなちっぽけな魂の祈りである。この小さな魂にかかっているところの聖霊の祈りが、聖霊と一体になっているところの祈りが、その人その人を通して、地上がどのように20世紀がどうなるかが――「どうなるかが」と言ったら、ただ祈り三昧で過ごしているという意味ではないですよ、実存そのものがまた祈りですからね――とにかく、どんなにそれが失敗にみえようが、どんなに実を結ばないようにみえようが、このキリストに即するところの祈りの実存は、それが勝利です。

そのことを最も証していらっしやるのは、誰だろう、イエス・キリスト、彼そのひとである。キリストこそ、祈りの勝利を本当に勝利したひとである。地の果てまでも、世の末までも、キリストの本願はかくも素晴らしく進んでいるではないですか。キリストの力はどこにあるか。聖霊に於けるところのこの祈りの力にある。キリストのあの実存はどこにあるか。父の懐に在っていたあの祈りにあった。私たちは、もう何ともかんと、もう「祈り」なんていう言葉も発しなくていいような始末です。おわかります。

